総 説

東洋医学の生命観からみた鍼灸医学の
特徴について

矢 野 忠*

要旨 今、あらゆる分野において機械論的パラダイムに基づく合理的な科学主義の限界が指摘されている。その限界性を越える視点として生命論的なパラダイムが注目されている。それは医学の分野においても同様に生命のパラダイムに基づく「医学の質」が問われている。

東洋医学の生命観は、本来的に生命論的パラダイムに基づくものである。特に鍼灸医学は「心身一如」の身体観に基づく無薬物療法であり、その治療原理は自然治癒力の賦活にある。そこには病人を中心とした全人的医療が展開され、「ケアの医学」が実践されている。

このような特徴をもつ鍼灸医学は「人にやさしい医学」として極めて魅力的であり、次代を担う新しい医学として期待される。

I はじめに

最近、「地球にやさしいエネルギー」「人にやさしい政治」「人にやさしい医学」など「やさしい」という言葉をよく耳にする。それは「やさしさ」を失ったことへの深い反省の中から生まれた言葉であろうか。

「やさしさ」とは、一言でいってしまえば相手思いやるということである。したがって失った「やさしさ」を取り戻そうとすれば相手の存在を尊重し、相手との関係を重視する考え方に立つことが大切である。

それには新たな視点へと転換をはからなければならない。例えば「他者としての世界」から「自己を含む世界」への視点の転換¹⁾である。

本論では、「地球にやさしい鍼灸をめざして」(第44回全日本鍼灸学術大会, シンポジウム, 1995.)というテーマを「人にやさしい鍼灸」と読み替え、東洋医学の生命観を軸として鍼灸医学の人への「や

さしさ」について検討を試みつつ、21世紀の医療における鍼灸医学の役割について展望してみた。

II 「知」の転換

近代から現代まで、人類社会を支えてきたパラダイムは合理的な科学主義であった。この合理的科学主義は「機械論的世界観」と「要素還元主義」によって特徴づけられる。すなわち、世界はいかに複雑であろうと一つの巨大な機械であると捉え、機械を要素に分析し、それらを再び統合することによって世界のメカニズムを理解することができるとした。そして、人類社会はこの合理的科学主義によって驚異的な科学文明を築いた。

合理的科学主義は、今なお各種の科学分野で依然として有効な「知」のパラダイムとして機能している。この「知」のパラダイムは一般に機械論的パラダイムと呼ばれている。しかし、万能と考えられた機械論的パラダイムによる科学的手法にも限界性が指摘されるようになってきた。

人類はかつて経験したことのない未曾有の問題を抱えるに至った。田坂¹⁾らによれば、その一つが地球規模の諸問題(グローバル・プロブレム: 環

* Tadashi YANO 明治鍼灸大学第一東洋医学臨床教室

Key Words : 鍼灸医学, 東洋医学, ケア, 生命論, 機械論

境汚染、食糧不足、資源枯渇、人口爆発といった諸問題)であり、もう一つが成熟社会の諸問題(フロンティア・プロブレム：価値観の多様化とそれに伴う社会における意志決定の困難性、社会的受容の困難性など)である。そしてこれらの諸問題はもはや科学技術の開発だけでは解決できないほど深刻化しており、しかも政治、経済、文化などとも深く関連し、複雑化している。

したがって、これらの諸問題を解決するには要素還元主義的なアプローチでは限界があり、むしろ学際的、全包括的にアプローチすることが必要であるとし、そのための新たなパラダイムを創造しなければならないと指摘している。

そのパラダイムとは、相手を尊重し、相互の関係性を重視する“やさしさ”の眼差しをもった思想と理論である。それは田坂¹⁾の「生命論パラダイム」、中村²⁾の「臨床の知」、清水³⁾の「意味を創出する関係科学」、石川⁴⁾の「生命思考」などであるが、根底においてそれらに共通する視点は生命論的なパラダイムの視点である。

では田坂¹⁾の生命論的パラダイムとは、具体的にどのような視点を指すのか。この点について田坂は図1で示すような様々な「知」の視点の転換を挙げている。それは世界を「巨大な機械」と見る機械論的世界観から、世界を「大いなる生命体」

とみる生命論的世界観への視点の転換である。具体的には「要素還元主義」から「全包括主義」へ、「設計・制御」から「自己組織化」へ、「他者としての世界」から「自己を含む世界」へなどの視点の転換で特徴づけられるとしている。

また、中村²⁾は「科学の知」から「臨床の知」への転換として「普遍主義(科学的宇宙観)」から「コスモロジー(有機的宇宙観)」へ、「論理主義(一義的)」から「シンボリズム(多様性・多義性)」へ、「客観主義(一方的)」から「パフォーマンス(身体的相互行為)」を挙げている(図2)。

(中村雄一郎より)

図2 「科学の知」

中村雄一郎氏の「臨床の知」²⁾より整理した。

Ⅲ 東洋医学の生命観

東洋医学の生命観は、生命論的パラダイムと類似した視点を有している。というよりはむしろ東洋医学の生命観そのものが生命論的パラダイムとみなすことができるであろうし、生命論的パラダイムの「知」の視点の原初は東洋思想(東洋医学も含む)にあったともいえよう。

1. 自然と共に

図3は筆者が東洋医学の生命観における視点と生命論的パラダイムの視点とを対応させたものである。

東洋医学では、人間は「自然と共に」あることを基本とし、しかも常に時間とともに変化する状態を重視している。人間と自然との関係を「人と天地とは相応ず」(『邪客篇』⁵⁾)と捉え、天の気と地の気が出会う気交の中で人間は生かされているとしている。すなわち人間と自然との関係を開放系(Open System)の視点から論じている。そして両者の望ましい在り方として例えば『四気調神大論

視 点 の 転 換

機 械 論 的 パ ラ ダ イ ム の 視 点	機械論的世界観	→	生命的世界観	生 命 論 的 パ ラ ダ イ ム の 視 点
	静的な構造		動的なプロセス	
	設計・制御		自己組織化	
	要素還元主義		全包括主義	
	フォーカスの視点		エコロジカルな視点	
	他者としての世界		自己を含む世界	
	性能・効率による評価		意味・価値による評価	
	言語による知の伝達		非言語による知の伝達	

(田坂広志による)

図1 機械論的パラダイムの視点から生命論的パラダイムの視点への転換

田坂¹⁾は現代の様々な問題を解決するには機械論的パラダイムの視点では限界があるとし、生命論的パラダイムの視点の重要性を指摘している。

図3 東洋医学の生命観にみる生命論的枠組み
(あるいは視点)

東洋医学の生命観には種々の生命論的パラダイムの視点が渾然として溶け込んでいる。これをプリズムで分光してみた。

篇』⁶⁾に見られるように季節に応じた生き方(養生法)を展開している。さらに『順気一日分為四時篇』⁷⁾では病状は時間によって変化することを述べている。東洋医学では、陰陽消長の原理によって人間は時間と共に変動することを深く認識しており、時間の流れを診断・治療に応用する子午流注⁸⁾として発展した。

このような東洋医学の視点は清水^{9,10)}のいう「生きている自然」「生きている状態」を重視する視点であり、「生きている自然が与えてくれる条件によって人間は生かされている」¹⁰⁾との認識が根底に流れている。この認識の中に図3で示した東洋医学の生命観の視点が渾然一体となって息づいている。

また、東洋医学の生命観の視点は、現代科学における総合科学としていかされている。例えば陰陽消長の原理は時間生物学(Chronobiology)として、子午流注は時間治療学(Chronotherapy)として、『四気調神大論篇』の一部は生気象学(Biometeology)として発展している。

ルネ・デュボス¹¹⁾は「現代の科学の流行はともかくとして、生命のもっとも重要な問題が、遺伝子とその構造単位、あるいはそれらが支配する化学反応の見地から生命を解析することにあると信じる理由はなにもない。はるかに重要なことは、生物と環境全体との複雑な相互関係にあると主張してよいであろう。」と述べ、現代生物学の在り方を批判し、生物と環境との関連性を解明すること

の重要性を主張としている。

時間治療学も生気象学も個体と環境との関連性を重視する視点に立った新しい学問分野であり、分析に対する総合の科学としてこれからの発展が期待されているが、その原初においては東洋医学の基本的な生命観の視点であった。

2. 心身一如としての身体

東洋医学では五精(魂・神・意・魄・志)あるいは五情(怒・喜・思・憂・恐)といった精神活動は五臓にあるとしている。すなわち五精・五情(精神活動)は五臓(身体)に溶け込んでいるとの認識であり、東洋医学は心身一如としての身体観を特徴としている。

特に鍼灸医学の診断・治療の基本は、身体様々な所見を通して心身の状態を把握し、鍼と灸を用いて身体にアプローチする。例えば抑鬱状態という極めて精神的な病状に対する治療であっても肝経にアプローチするように身体に働きかけることを旨とする。

このように東洋医学の身体観は「心身一如」として、また市川¹²⁾のいう「精神としての身体、身体としての精神」といった視点であり、このことによってはじめて病人それぞれに適した個別的な診療が展開できるものと考ええる。すなわち全人的医療の視点が東洋医学の基本であった。

3. 気流れるシステムとしての身体

「心身一如」としての身体は、さらに臓腑経絡系というエネルギー伝達系によって一個の有機体に構成されている。この臓腑経絡系においては、肝の臓と肝経とが一つの機能ユニットとして在るように、12の機能ユニット(臓腑経絡)がそれぞれ独自の機能をもちながらも相生と相剋によって全体の秩序を維持調節している。

すなわち東洋医学においては内包された制御機構を明確に構想し、人体はシステムをもった有機体として認識していたことがうかがえる。もちろん、システム全体の秩序維持は「気」という情報によって行なわれるとするが、より安定した内部秩序を形成するために外界との情報交流(気の交流)を重視する点に東洋医学のシステム論としてのダ

イナミズムがある。

この臓腑経絡系システムは清水¹⁰⁾の提唱したバイオホロニズムの考え方に類似している。清水^{9,10)}は生命の本質に迫るには「生きている状態」をより深く理解することが重要であると指摘し、バイオホロニズムの考え方を提唱した。バイオホロニズムの特徴は「生きているシステム」の要素である「ホロン」の性質にある。清水のいう「ホロン」は、ケストラのいう「ホロン」¹³⁾とは異なり、選択的な内部状態をもつ協力的な要素と捉え、要素としての「ホロン」は全体における秩序形成に自主的に参加するとした。同時に「全体」の秩序によって「ホロン」は影響されるとし、「全体」と「ホロン」はフィードバックのループを形成し、このループが回転することによって、再度自己組織化による秩序が形成(新しい秩序も含む)されるとした。当然、そこには「全体」に参加する「ホロン」の自主的選択性による「ゆらぎ」が生じるが、この「ゆらぎ」は柔軟かい安定した秩序を形成する特徴となる。

東洋医学におけるシステム論については、これからの研究課題であるが、そこには清水の指摘する「生きている状態」を特徴づける「自己組織化」と「ゆらぎ」の概念は十分含まれているものと考ええる。しかも「陰陽平衡」と「陰陽消長」の原理による時間を重視した柔軟かいシステムとして認識していたことは東洋医学におけるシステム論の特徴といえるであろう。

Ⅳ 人にやさしい鍼灸医学

これからは生命論的なパラダイムの視点が必要であると述べた。そこには「共生」の思想があり、「やさしさ」の眼差しがある。

東洋医学の生命観はその根本に生命論的パラダイムの視点を渾然として内包しているが、特に鍼灸医学は無薬物療法として自然治癒力を治療原理とするだけに、マイルドで「人にやさしい医学」としての要件を満たしているものと考ええる。

1. 自然治癒力を重視する鍼灸医学

鍼灸医学の治療原理は薬を用いず、鍼と灸という微細な物理的エネルギーを体表の特定部位に作

用させ、生体の自然治癒力を賦活するところにある。しかも生体の自然治癒力を最大限に発揮させるために人間そのものにアプローチすることを旨とする。治療の要諦は「治神」¹⁴⁾にあると指摘されているように、良好な治療者・患者関係を背景として鍼灸技術が展開される。

もちろん鍼灸技術は生体の反応を強制的に操作することを意図するものではなく、生体の主体性(治癒力)にまかせると言った、極めてマイルドな方法を取る。ただし、生体の主体性にまかせるといっても、病的な状態においては主体性の発動が明確に発現できるように支援しなければならない。それが虚証に対する補法であり、実証に対する瀉法である。すなわち、生体に内在する治療システムが本来の機能を発揮できるように鍼灸技術で援助するところに鍼灸医学の治療の特徴がある。

また、鍼灸医学の診察法では、身体は臓器によって構成された肉体ではなく、精神が可視された身体、独自性をもった主体的な身体であると捉える。したがって四診情報にみられる種々の身体所見から心身の状態を把握し、病人の理解(病苦)に迫ろうとする。四診法は病人を理解するための手立てであると考ええる。そして、治療においては「主体的な身体」「精神が可視化された身体」に働きかけ、不快な症状を軽減することによって、正常な身体感覚を取り戻し、統合された人間性を回復させようとする。

2. 「体感」を重視する鍼灸医学

高橋¹⁵⁾は、高い健康を実現するには「心地よさの発見」が大切であるとし、「心地よさが最良の生き方である」と述べている。そして「心地よさ」の第一の質として一体感を挙げている。一体感とは、自分の体を受け入れている感覚であり、自分の体を本当に自分のものであると感じること(現在感)であるとし、これは体の軽さによって生ずるものであると述べている。この高橋の観点は「体感」の重要性を指摘したものである。

筆者も鍼灸治療の非特異的効果を体感の視点から捉えようと幾つかの研究を行なった。明治鍼灸大学附属鍼灸センターに通院する患者212名の鍼灸治療後の気分変化を「気分チェックリスト」で

調査したところ 80 %前後の患者は治療後、「心地よい」気分になっていたことがわかった¹⁶⁾。また、刺鍼の心地よさを脳波トポグラフィ法で検討したところ α 帯域の増大が認められ、刺鍼によるリラクセーション効果が確認された¹⁷⁾。

このように鍼灸治療は「快の医学」としての要素を持っている。鍼灸治療は軽やかで爽快な体感と呼び起こさせ、「よい気分」に誘導する。「よい気分」は高い健康感と結びついた感情であるだけに鍼灸医学の治療効果上の重要な要素であると考ええる。

これまでの治療はどちらかといえば苦痛を伴うことが多かった。患者を英語で patient というが、patient とは、その語源からいって耐えるということであり、診断・治療に耐えてこそ患者たりえた。しかし、治療困難な慢性疾患や心身の歪みによる疾患では必ずしも耐える治療が適切であるとは言えず、患者が楽しむ治療あるいは快適な治療が有効だとされている¹⁸⁾。それがアメニティ・メディスン (amenity medicine) である。

鍼灸医学はアメニティ・メディスンの多分に要素を持っている。これからの医療にアメニティの概念が導入されることは確実であろうし¹⁹⁾、21 世紀の医療を展望したとき鍼灸医学がもつアメニティ性は大きな役割を果たすことができるものと考ええる。

3. 「触れる」ことを重視する鍼灸医学

本来、医学とは病人を癒すためのものであり、医学的知識や医療技術はすべて病人を救うためのものであった。しかるに現在の医学は医科学 (Medical Science) の色彩が強い。

医学における医科学の先鋭化は「キュア (Cure) の医学」を尊重し、「ケア (Care) の医学」を軽んずる医学の価値体系を形成してきた。しかし、キュアの医学は医療環境の変化によって変わらざるを得なくなってきた。その大きな要因は成人病などの慢性疾患の増加による疾病構造の変化である。このような疾病構造の変化は、キュアよりはケアを必要とし、疾病を対象とするよりは病人を診ることを迫っている。

では「ケアの医学」とは、どのような医学を指

しているのか。端的に言えば血液生化学的な検査データの背後に潜む病人の人生にも眼を向けてくれる医学であり、誰のものでもない「私の身体」を診てくれる医学である²⁰⁾。

ケアはその目的によって perinatal care (生), elder care (老), primary care (病), terminal care (死) に分けられるが、その根本は holistic care であり, pastoral care でなければならない (図 4)。

図4 ケアの医学

ケアにはその目的によって各種のケアがあるが、その根本は holistic care であり pastoral care である。

そしてケアリングにおいては「共感」と「思いやり」が大切であるとし、「共感が眼であるならば、思いやりは手である」。このような観点からは池辺²⁰⁾は、ケアは肌の温かみのある手仕事であると述べている。

鍼灸治療をはじめとする手技療法はまさに肌の温もりを感じさせる手仕事の治療である。そこには痒いところに手が届くような配慮が常にあり、心がそのまま手となっている。手は「手そのものが無限に多くのことをなしうる如意宝珠」²⁰⁾になって多く癒し得る。それは古来から言われてきた「医療の原点は手当てである」に通ずる。手がケアの出発点であるならば鍼灸医学は「ケアの医学」であるといっても過言ではなからう。

VI さ い ご に

平成7年度版の厚生白書²¹⁾には、これからの医療の中心は「質」であると指摘されているように、「ケアの医学」の重要性が認識されてきた。それには疾病構造の変化とともに高齢社会における老人

医療の問題が背景となっているが、底流には今日の医学を支えてきた機械論的パラダイムの行き詰まりがある。

それは医学の分野だけの問題ではなく、政治、経済をはじめとするあらゆる分野においてそうであり、各分野に共通した問題を解決するために新たなパラダイムが求められはじめた。それは社会現象的には様々な分野における「やさしさ」への回帰の表現であり、思想的には東洋思想を視野に入れた生命論的なパラダイムの提唱である。

筆者は「やさしさ」の根源を東洋医学の生命観の視点に置き、その視点から鍼灸医学の特徴について述べてみた。鍼灸医学は本質的に「ケアの医学」であり、「人にやさしい医学」である。そして機械論的なパラダイムに変わるものとして新たに提唱された生命論的パラダイムの視点を内包している。その意味において鍼灸医学は次代を担う医学として極めて魅力的であり、新しい医学の創造を推し進める基盤にもなり得るものと考ええる。

謝 辞

第44回全日本鍼灸学術総会のシンポジウムで発表の機会を与えて下さいました大会会長 弓削先生ならびに座長の労をお取り下さいました時本先生、真鍋先生に対し、心より感謝の意を表します。また、明治鍼灸大学大学院教授 森 和先生より貴重な助言を賜りました。ここに深甚の謝意を表します。

参考論文

- 1) 田坂広志：21世紀の知の潮流「生命論パラダイム」、生命論パラダイムの時代、日本総合研究所編、グイヤモンド社、東京(1993),pp 1～65.
- 2) 中村雄一郎：臨床の知とは何か、岩波新書、(1992).
- 3) 清水 博：生命と場所、意味を創出する関係科学、NTT出版、(1992).
- 4) 石川光男：生命思考、ニューサイエンスと東洋思想の融合、TBSブリタニカ、(1986).
- 5) 小曾戸丈夫、浜田善利：意釈黄帝内経霊枢、築地書館、東京(1971),pp 232～237.
- 6) 小曾戸丈夫、浜田善利：意釈黄帝内経素問、築地書館、東京(1971),pp 15～17.
- 7) 小曾戸丈夫、浜田善利：意釈黄帝内経霊枢、築地書館、東京(1971),pp 153～155.
- 8) 川井正久、王永鍾：針灸時間治療学—子午流注法一、谷口書店、東京(1989).
- 9) 清水 博：生命を捉えなおす、生きている状態とは何か、中央新書、東京(1987).
- 10) 清水 博：ホロンとしての人間、ミクロコスモスへの挑戦、石井威望、小林 登、清水 博、村上陽一郎編集、中山書店、東京(1984),pp 29～80.
- 11) ルネ・デュボス：人間であるために、みすず書房、東京(1970).
- 12) 市川 浩：精神としての身体、講談社学術文庫、講談社、東京(1992).
- 13) アーサー・ケストラー：機械の中の幽霊、日高敏隆、長野 敬訳、ベリかん社、東京(1969).
- 14) 小曾戸丈夫、浜田善利：意釈黄帝内経素問、築地書館、東京(1971),112～114.
- 15) 高橋和巳：心地よさの発見、三五館、東京(1993).
- 16) 矢野 忠：ストレスイからの解放そして鍼灸、全日本鍼灸学会誌 43;143～153.(1993)
- 17) 矢野 忠、丸山彰貞、田中敦子ら：鍼通電、TENSによるEEGトポグラムの変化、明治鍼灸医学 創刊号;55～64.(1985)
- 18) 永田勝太郎：QOL、講談社、東京(1992),pp 70～92.
- 19) 厚生省編：厚生白書、平成7年度版;pp 23～33.(1995)
- 20) 池辺義教：ケアの本性、哲学と医療、中川米造編集責任、弘文堂、東京(1994),pp 29～55.
- 21) 厚生省編：厚生白書、平成7年度版;pp 4～14.(1995)

(〒629-03 京都府船井郡日吉町
明治鍼灸大学)

Characterlistics of Acupuncture and Moxibustion Reviewed from The Perspective of Oriental Medicine

Tadashi Yano

Meiji College of Oriental Medicine,

Department of first Clinic of Oriental Medicine.

The limitations of science based on a mechanistic paradigm has been noted in various fields such as politics, economy, science and so on. A paradigm based on organicism is worth considering instead of the mechanistic paradigm.

In the field of medicine, as in other fields, the quality of medicine has required perspective based on organicism.

The organicism of oriental medicine was origenally based on a paradigm of organicism. Especially acupuncture and moxibustion are unique therapies in which the therapy is based on the concept that mind and body unite a single entity, and the principle of therapy is the activation of the natutal healing power using acupuncture needles and moxa. In acupuncture and moxibustion medicine based on organicism, holistic medicine is performed from the perspective of treating the whole patient.

Practicing acupuncture and moxibustion with these considerations is a fascinating medicine for human being and it is a hopeful new medicine for the next generation.

Key Words: Acupuncture and Moxibustion Medicine, Oriental Medicine, Care, Organicism, Mechanism